

俄增氣、武州被凝、數箇丹祈云云、宮内兵衛尉、安藤左近將監、同二郎、雜色兵衛尉等、爲御看病祇候、各敢不避其席云云、

〔雲萍雜志〕<sup>三</sup>誰人の塚といふことゑらぬ古墓歌の中山の入口にあり、鼻血の出るとき、この塚をいのるに、かならず験あり、何の花にてもさ、げて、鼻より血の右よりいづれば、左の陰囊を握り、左より出れば、右をにぎりて拜すれば、忽に愈るといへり、

麻痺

〔倭訓栞前編十一〕<sup>志</sup>「まびり 瘡也といへり、澀る義にや、麻痺をいへり、まびり京へ上れといふ俗諺あり、笑府に、俗云脚麻、脚麻上鼻頭、謂以柴芒貼鼻端即止と見えたり、

〔俚言集覽志〕瘡、京へ上れ、<sup>略</sup>中 高野紀行、痛はしや千年もなく、塵ひねり、尾蠅にまびりも京へ清水まゐり、<sup>宗因</sup>

〔嬉遊笑覽<sup>八</sup>方術〕又治脚麻法、如患左足、以草貼左目上、臉右亦如之、立止、又云、以紙貼鼻尖、これらも常に小兒などの、まびれ京へ上れとてすることなり、草のちりを額の正中に貼て、左右をいはざるは誤なるべし、不角が篋絨輪十痒れも、京へ上れ、いんのこ、祇園の犬の子は、額に押すなれば、とり合せてかく作れり、又貫目には洩たる戀の重荷なり、まづしびれ琥珀同性、額に、塵を付るをいふなり、

腫病

〔倭名類聚抄<sup>三</sup>瘡〕腫 山海經云、府<sup>音符、一音府、今案俗所</sup>腫也、野王案、瘡<sup>之勇反、字亦</sup>腫也、身體黧起、虛滿也、

〔箋注倭名類聚抄<sup>二</sup>瘡〕那波本乳府齒府作乳腫齒腫、按乳府者、上文乳癰條、俗云知布是也、類聚名義抄有乳府齒府、伊呂波字類抄亦有齒府、作乳腫齒腫誤、<sup>略</sup>中 所引文、原書無載、按原書西山經云、竹

山有草、其名曰黃蘗、浴之已疥、又可以已附、郭璞注、治附腫也、音符蓋郭氏以治代已、附下增腫字、以解已附之義、疑源君所見本脫治字、故誤爲以腫也、釋附字、遂引之云、附腫也、又按府即附字、集韻附腫也、廣韻府腫是也、然附字說文所無、附字訓、俛病亦非此義、其訓腫之字、古用浮字、浮汎也、謂腫